近くて，遠くて，羨ましい場所

河　田　優　子
（2003 年度 B, 2005 年度 M, 2008 年度 D）

創設 80 周年おめでとうございます。

私が当時の英文学科に入学したのは 2000 年。まさか 15 年近く経った今このような書き出しから始まる文章を書くとはその頃の私は考えもしなかったでしょう。約 15 年。その数字を見て，細々とではあるけれどこれほど長く関学英文と関わっているのだなと改めて感じました。

当時生まれた子供が高校生にもなろうかという月日を過ごしたにも関わらず，進学先に関学の英文を選んだのはこれといった理由はありませんでした。国公立を目指していましたが，数学が苦手だったため，どうしてもそれが足を引っ張ってしまい，「他の科目に力を入れたほうがいいんじゃないだろうか」と悩んでいました。そんな時，友人のひとりが関学を目指していることを知りました。彼女が語る関学の話を聞くうちに「尼崎の自宅から近いし関学もいいなぁ」と意識するようになった，という何とも不純なものです。その中で英文を選んだのは，英語をもっと読めるようになりたいという理由からでした。

授業が始まってからは予習に追われる日々でした。科目名が違ってもテキストで使われている言語は英語で，必死になって辞書（当時私が使っていたのは紙の辞書）を引いていました。その反動なのか，一般教養の科目は東洋史や日本史を履修していました（もともと好きだったせいもあるんですが)。日本語や漢字だけのハンドアウトを見るとやけに新鮮に感じたのを覚えています。

授業中や終了後の休み時間に不明な点をよく質問していました。精読の授業では特にあれやこれやと細かく質問していたので，院に進んだ時に 5 年

ぶりにお会いしたその先生が「あなたのことはよく覚えていますよ」と仰ってくださった時は嬉しいやら恥ずかしいやら申し訳ないやら何とも言えない気持ちになったのを覚えています。

そんなある日の「英語講読」という授業後に，担当の先生に質問をしに行きました。2 時間目の授業だったので，お昼休みの気安さからか大体何人かの学生と先生が雑談をすることが多くありました。その日は，英語で書いたエッセイを返却してもらったのです。私の質問は確かエッセイを書いていた時にどうしても英語にできなかった言い回しに関するものだったかと思います。その最後に「どうすれば言いたいことを英語にできるようになるんでしょうか？」というようなことを先生に尋ねました。何とも幼い質問だなと今となっては思いますが，当時はそんなことを感じることなく，気づくと口にしていました。何か解決策があると思っていて，先生はそれをご存知なんだと考えていたんでしょう。そうすると先生が「いやぁ，僕もねぇ，言いたいことが書けなくて苦労してるんです。僕も勉強中なんです」と答えてくださったんです。驚きました。先生でもそうなのか，と。私が生まれるずっと前から英語に携わっているのに，書けないことがあるのか，と。その時の私は「じゃあ，私なんて書けるようになるわけない」と落ち込みました。けれど，しばらくすると，先生をしてそれほど真摯に向かわしめるものは何だろうと考えるようになりました。学び続ける人であるということ，わからないことに取り組める楽しさがあるということなどをぼんやりと意識するきっかけとなった言葉でした（先生はその数年後に退官されましたが，院に進学した時にお会いしました）。

けれど，特に院に進学しようと考えていたわけではありません。就職活動もしていました。出版社に行きたくて，でもあっさりと落ちてしまって，脱力していました。そんな頃，友人が「進路のひとつとして大学院進学を考えている」と言い，今から話を聞きにいくとのことなので興味本位で一緒についていきました。「思う存分学べるというのは本当に面白い」と先生が笑顔でおっしゃる言葉は，それはそれは魅力的に聞こえました。そして大学院進

学を決めたのです。

大学院時代は辛くも楽しいものでした。読む量が段違いで，予習も授業も大変でした。けれど，何よりも学年の区別なく，しかも私よりも比べようがないほどはるかに優秀な方々と一緒に席を並べ，同じテキストを読むというのは刺激的でした。「教える先生と教わる学生」ではなく，もちろんその関係がないわけではないのですが，その部屋にいるのは，誰しも学ぶ人であり学びたい人ばかりでした。勉強すればするほど何もわかってないことを知りました。知っていることなんてごくわずか。そのごくわずかのことでさえも，ちゃんと知っているのかもわからない。お酒の席でそんなことをぽつりと漏らすと「無知の知だね」と言われたことがあります。

大学院の後期に進学したのも周りの学ぶ熱意に惹きつけられたのが理由でした。私は決して優れた院生ではありませんでした。英語のテキストがきちんと読めるわけでも，文学研究の素質があるわけでもなく。凡庸なコメントしかできず歯痒く思ったことのほうが多いです。それでも，ここは面白い場所だと思うのは私の中にそういう熱意が，周りの熱意にひきつけられその熱意に憧れを抱く何かが存在しているからなのだろうと思っています。けれど，今現在，両親の病気という私の個人的な事情により，すっかり足が遠のいてしまいました。それなのに，勉強会やお酒の席へのお誘いを変わらずにいただけていてとてもありがたいと思っています。が，なんとなく腰が引けてしまいます。「遠慮なくいつでもおいでよ」という言葉に誘われて思い切って加わってみると，やはり相変わらずの熱意に満ちていてとても楽しくて。本棚の中でうっすらと埃をかぶっている研究書を眺めていると，少しの後ろめたさともに，そこで感じた熱意を思い出します。

関学英文の魅力というのはそういうところなんだろうなと思います。これからもそういう場所であってほしいと思っています。

創設 80 周年本当におめでとうございます。